
メモダス

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモダス

【Nコード】

N0270BA

【作者名】

y u n a g i

【あらすじ】

暴君こと水無月アスカのせいで春休み最後の休日を返上する事になった如月瑞希とアスカの弟、水無月アキトの二人はいつも通りこき使われていた。その日の帰り道、瑞希は不思議な雰囲気を漂わすシスターと出遭い、他愛のない会話をした次の日にシスターさんを見た目がそっくりな転入生が登校初日に突然「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」と、爆弾発言をしてクラスを凍りつかせたのだが……。

序 章　死にたがりの少女　前篇 其の一

不思議な不思議な夢を見た。

周りには何もない見渡す限り真つ白な景色が広がる空間にポツリと佇む一人の少女……。

虚ろな表情を浮かべながら上を見上げて細くてしなやかな透き通る肌質の両腕を差し出して何かを求めているような。まるで、この何もない真つ白な空間から誰かが手を差し伸べ助け出してくれる事を待ち続けているようだった。

けれど、それは叶わぬ願いだと少女は薄々感じていた。時の流れさえ不確かなこの空間で一体どれだけの歳月が経過したのだろうか。いつからこのような事を続けているのだろうか。そして、いつまで続けられいいのか……。

それでも少女は眉一つ動かさず、虚ろな表情のまま差し出した腕を下ろさずに続けた。それが叶わぬ願いだろうとなんだろうと少女は少しでも可能性があるならと、祈りを捧げるように生気の無い瞳をゆっくり閉じて

「はい。却下」

呆れ果てた表情を浮かべてテーブルに叩きつけるように冊子を投げ飛ばし無情にも没宣告を告げるカチューシャを付けたセミロングの凛々しいお顔立ち、すらりと伸びた手足に非の打ち所が無い出るところ出たコケティッシュな体躯の少女。水無月^{みなつき}アス力は窓に寄りかかるように身を預けた。

「決断早えーよ、姉貴！」

アス力の無情な宣告に納得いかずテーブルを勢いよく叩き、立ち

上がりながら怒号を上げた少年。少女と瓜二つの顔付き、筋骨隆々とまではいかないが長身のがっちり体型である弟の水無月アキトは怒号を上げた後に静かに着席した。

「アキの言い分は分かるわ。だけど、根本的につまらない」

眉一つ動かさず淡々とした口調で吐き捨てるようにアキトの書きあげた最初で最後の今世紀最大の作品を酷評したアス力は額を押えて大きく嘆息する。

まだ、序盤中の序盤。出だししか目を通していないってのに、判断を下すのは少し早計過ぎやしないか、と心の内に留めながらも顔に出てしまっていたのか。アス力が眉間にしわを寄せてこちらを睨みつけているのに気付き、僕は目を逸らし少し咳き込みながら誤魔化した。

「まあいいわ。私がアンタ達に期待したのがそもそもの間違いだったわ。やっぱりこの退屈過ぎる生活を打破する為には私自身どうにかするしかないわね」

腕を組み仁王立ちをして凜々しい態度で僕達の事を嘲笑うかのように切り捨て、顎に手を添えて何か企んでいるのか思案顔になった。つたく、だったら最初から自分で何とかしろっての……。

僕が心の中でアス力に対して悪態をついていると弟であるアキトが姉に聞こえないように小声で、

「なあゝキサラ。そんなにつまらなかったか、コレ……」

姉にボロクソに言われ、少しムスツとした表情を浮かべながら彼が書きあげた作品が綴じられた冊子をこちらに提示して僕に意見を仰いできた。

ふむ、と僕は冊子に手を伸ばして流し読みではあったがアキトが書き綴った「仮題 閉じられた少女」に目を通した。

主人公の少年が毎夜毎夜見る不思議な夢に登場する虚ろな表情を浮かべる少女は一体何者なのか？ なぜ、少女は真つ白な空間に閉じ込められているのか？ なぜ、少年はこのような不思議な夢を見るのかという話のようだ。

「いや、お前は頑張った方さ。初執筆の僕達にたった十分で短編を書けと命令し、出来上がるや否や少し目を通してただけでつまらんとってテーブルに叩きつけるアレがどうかしていると思えん」
アキトに労いの言葉をかけた僕は伸びをしつつ背もたれに寄りかかり天を仰ぐ。その際に少し椅子が傾きバランスを崩しかけたのは当然の事ながら秘密だ。

「姉貴の悪口を言うなあああ！！」

突然、アキトは体を震わせながらアス力の悪口（？）を言った僕に対して唾を撒き散らし頬を上気させて怒号を上げる。

「黙れ、シスコン！」

「いや、黙らんぞ！ あんなんでも俺の大切な姉貴だ！ 誰であろうと姉貴の悪口を叩く奴は俺が許さねえ」。姉貴の悪口を言っているのはこの俺だけだ！」

弟である俺だけの特権だと誇張したいのか、アキトは両親指で自分の事を指さして意味もなくはにかんでみせる。

「あゝだったら、僕の代わりにお前の後ろで不気味に微笑みながら仁王立ちをしている姉貴に向かって一言言ってくれ」

「承知した。ホント、あのクソビッチは」

「アゝキゝくん。あのクソビッチって誰の事かなあ？」

僕の代弁者たるアキトの背後から口元を歪ませ凄惨な笑みを浮かべながら抱きつき耳元で囁く、ク 水無月アス力様……。

アス力様のしなやかで美しい腕がアキトの首に絡み、最初は抵

抗をしていたものの徐々にアキトの顔色が青ざめていき、目が白目をむき口から泡を吹いていた。それを特等席で目の当たりにしていた僕は手を合わせて、

「南無」

「まだ、死んでねえわ!」

ハアハア、とよっぽど苦しかったのだろう、アキトは肩をならし過呼吸のように必死に息を吸う。

「アキをいじめちゃだめよ。シゲル」

今し方、弟に行った教育(?)という名の暴力的行為は何もなかったかのようにアス力は微笑み、あたかも僕がやったかのように装う。

「直接手を下したのはお前だろうに」

僕は一応ながら後ろにいと教えてやったのだが、あの馬鹿が調子づいて口を滑らしたに過ぎない。決して誘導なんてしていないぞ。

「それはそれよ。そんな事よりもシゲルも私に何か意見がお有りなのかしら?」

笑顔のまま手と首をパキポキと鳴らし意見を言おうならば即手を下せるように慣らし始めた。

「いえ、何にもございません!」

僕はアキトの二の舞になるのだけは避けるべく、ご機嫌を損なわないよう椅子からすぐさま飛び上がり深深く土下座をした。腕が三角に綺麗に折れていたと思う。

ん? プライド? ナニソレ? ヨコモジワカンナイ……。

「そう、ならいいわ。それと今日はもう解散よ。また、明日からよろしくね」

そう言い残してアス力は野郎二人を残してすたすたと部屋を出て行ってしまった。

僕は少し一安心して椅子の隙間を縫うように手足を伸ばして床に
転げ寝る。

「アキト、生きてるか」

「……ああ、大分マシになった」

肩をならして呼吸を整えていたアキトの生存確認を済ませた僕は
ゆっくりと瞳を閉じる。

『……はあ』

野郎二人の大きな溜め息が部屋の中で虚しく木霊した……。

序 章　死にたがりの少女　前篇 其の二

ちょうど一年前の入学式での事だ。

特にこれと言った趣味も楽しみもなく、毎日毎日作業のように決まった時間に起き、決まった時間に食事を取り。何気なく学校に通っていた僕は何のこだわりもなく適当に選んだ高校に進学して、これから新しい学生生活が始まるぞと言った心構えもなく。ただただ無心で桜が咲き誇り風が吹くたびに舞い散る桜が成形する桜の絨毯を歩いていた。

僕と同じブレザー制服を着てこれから始まる高校生活に胸を躍らせてはしゃぐ同級生達を目の当たりにして僕は思わず首を傾げた。

当時の僕に　いや、今でもそうかも知れないが意味の分からない光景だった……。

別に娯楽施設に向かう道中って訳でもあるまいし、何がそんなに楽しいのか。学校をテーマパークか何かと勘違いしている馬鹿なのか。

あるいは昔、中学の時に「学校楽しくない」などとぼざいていた輩がいたがアレと同じ類の人間で学校と呼ばれる場所に何かを期待している阿呆なのか……。

そんな考えを巡らせながら到着した、これといった特徴もないどこにもある平凡な造りの公立高校……。適当に選んだだけあつてこの学校の特色やら校風は全く分からないし、僕が通う高校はこの学校で合っているのかさえ分からない。

だけど、体育館らしき建物に向けて歩く僕と同じブレザー制服を着た生徒達が周りにいるのだから合っているのだろ。第一、僕は入試試験などで何度も来ているはずなのだが、はっきり言って全然記憶になかった。それどころか高校生になった実感すらなかった。

考え方や気持ちが中学生の頃と何ら変わりが無いからなのか、た

ただただ通う場所が変わったという印象だけしかない。

ふむ、また退屈な作業の日々が始まるのか……。

演壇に立った校長なのか教頭なのか分からない中年代の男性が新入生に向けて話を始める。

周りの生徒達は演壇で流暢に話をする中年男性の話を真剣に聞き入っていたけれど、僕は校歌らしき歌詞が描かれた掛け軸のような物の近くにあった時計を眺めていた。早く時が過ぎるように念を込めて……。

はつきり言って苦痛だった。

季語を巧みに織り交ぜて上手く話しているつもりだろうけど、そんな事はどうでもいい。さっさと話を切り上げて解放してくれと願うばかりである。

すると、僕の想いが届いたのか話が終わり各々のクラスに向かう事となった。

他のクラスの生徒達の波に吞まれないように辿り着いた何の変哲もない教室で　一年B組の教室で僕は目を付けられてしまった。

いや、巻き込まれたと言った方がいいのかも知れない。

自席に座っていると突然、見知らぬポニーテールの女子生徒に「君は、生きているの？」と訳の分からない事を平然とした態度で僕の目を見て聞いてきたのだ。

生きているの？　と唐突に聞かれて呆気にとられながらも「はい、生きてますよ」と馬鹿正直に答えればいいのか分からずに黙っていると「私は、絶賛仮死状態中」とこちらは何も聞いちゃいないし何も言っていないのにも関わらず、女子生徒は嘆息交じりに訴えかけてきた。

この女子生徒がさっきから何を言っているのか全くもって謎だが、初対面の相手にする話では決してない事だけは理解できた。

「ねえ、退屈って人を殺すと思わない？ 私は殺すと思う。だって、生きてる心地すらないでしょ？」

僕の反応なんて知ったこっちゃないと言わんばかりに自論を展開する女子生徒に僕は少々気後れし、顔も引きずっていたと思う。

「だからね。君も私と一緒に生きたいと思わない？ 君を一目見た時にビビッと身体に電気が走ったんだ。私と同じ人種だとね……」

自分と同じお仲間を見つけて嬉しかったのか瞳を輝かせ、少し語気を荒げて言う女子生徒に僕は嫌気が差していた。

これが所謂空気が読めないって奴なのだろうか。ここまで人の顔色を間近で覗える距離でいるのにも関わらず話を繰り出せるってある種の才能を感じられる。それに傍から見ていると逆ポーズをされているように見受けられるし……。

「いや、一人盛り上がっている所すまないが……僕は君が思っているような人間じゃないと思う」

「いえ、君は私と同じく退屈の日々を暮らす死者も当然の存在よ。浮遊霊のように流れに身を委ねながらでいいの？ 私はごめんだわ。折角この人格で生を受けたのよ。だったらこの人格でしか味わえない人生を楽しまなきゃ損よ」

僕の言動で熱が入ったのか、バンと机を叩きさらに自論を展開する女子生徒。

ああ、火に油を注いってしまったな。さらに瞳をキラキラと輝かせている。それに思いのほか机を叩いた音が大きかったのか、周りにいたクラスメイト達が何事かとこちらを見つめているのに気付いた。

「君は生者になりたくないの？ 毎日が作業のような機械じみた

日々を送ってていいの？ 私は嫌だわ」

それでも女生徒は周りの視線なんて知っちゃこっちゃねえと一蹴するかのように声を荒上げて口走る。

ああ、分かった。これはアレだ。宗教が何かの怪しげな団体の勧誘なんだな。誘致人数のノルマを達成しないと現在置かれている地位から降格されるみたいなシステムか？ だから、ここまで必死に熱弁しているんだな。まるでマルチ商法みたいだ。

うん、だとしたらだ。周りのクラスメイト達を巻き込む訳にはいかないよな。目を付けられたのは僕なんだし……。

まあ、本音を言えばクラスメイト達の事なんてこれっぽっちも考えていない。さっさとこの状況を打破したい、ただそれだけだ。

「ああ、分かった分かった。降参だ。話なら後でたっぷりとどっぷりと聞いてやるからこの場は引いてくれ」

僕は息を吐いて女生徒の熱意にやられて少し心が折れたように見せた。もちろん嘘だ。この状況を打破されれば、僕の勝ち。後はとんずらすればいい。

「そう？ なら決まりね。じゃ、行きましようか」

女生徒は手を叩きそうという僕の腕を掴んで走り出していた。

僕は状況を飲み込めず呆氣にとられる。この女生徒は僕の話聞いていたのか？

いや、これっぽっちも聞いちゃいないな。

半ば強引に僕は女生徒に引っ張られるような形で不本意ながら教室を後にする事になり、どういう道筋で辿り着いたかさえ分からない、とある部屋で僕は女生徒と顔がそっくりな男子生徒と出会う事になった……。

序 章　死にたがりの少女　前篇　其の三

アキトと学校で別れてから僕は一人寂しく家路を歩んでいた。

「はあ」

僕は学校を出てからずっとこの調子で溜め息を漏らしている。

本来ならこの日が最後の春休みだったはずなのだが、姫様のワガママに付き合う羽目になり休日がおじゃんになったからだ。

まさか、僕達三人で　いや、実質二人、か……。入学式の準備をする事になるなんて思いもよらなかった。それも当日の早朝にだ。無計画すぎる……。

こちらと気持ちよく安眠していたって言うのに禍々しい着信音が何度も何度も部屋の中に鳴り響き、しつこいから出るや否や「学校に集合！　以上」と一言だけ言い残して切りやがり、こちらの反論の余地すら与えてはくれない暴君……。

やむなく学校に行き、椅子やらを体育館に並べて準備が終われば、今度は姫様の暇つぶしに付き合わせられる羽目になり短編小説を書く事になった。書き終わったら書き終わったで「つまらない」と一言で全てを一蹴し、僕たちの頑張りの結晶をテーブルに叩きつけて入学式が終わってからの片付けがまだ残っているっていうのに一人で帰ってしまう始末……。

全く……アス力のおかげで眠いし、しんどいしで散々な春休みの最後を迎える事になってしまった。

「はあ」

周りにいた通行人にも聞こえるほどの大きな大きな溜め息を僕は吐いた。僕はこの歳で苦労人なんだぞ、と少しアピール感を込めて

……。

そんな中、通学路である車やら通行人が往来する幹線道路をいつも通り黙々と歩いていると見慣れたはずの景色なのだが　なぜかこの時意味も分からず、いや意味なんてないのかも知れないが、とある一つの建物が目に付いてしまった。

僕の左手に木々や草花が生い茂る庭園のような敷地内に最近建てられたように錯覚させるほどの外壁が真っ白で茶色い屋根が特徴的な教会がぼつりと建っていた。

いや、存在していた……？

ふむ、元々あったのならさすがの僕でも覚えているはずなんだが……。って、毎日のように通る通学路だろうに覚えてない方がおかしいだろ。

しかし、幾ら記憶を遡ってもこの場所に教会があった覚えがない。それに周りの通行人達も見えているのか見えていないのかは分かりかねるが別に気にも留めていない様子だ。

でも、何だろうこのモヤモヤ感は……。

ただの勘違いかも知れないけど、ちょっと顔を出してみる、か……。

どのみち家に帰った所でやる事は一つしかない訳で　うん、寝るだけだ。

だったら、やむなく休日返上したこの最後の春休みだった日をアスカの言葉を借りれば、どんな状況だろうと楽しまなきゃ損よ、だ。

……　ああ、アスカに毒された、かな？

僕は首を振って「大丈夫。毒されていない」と自分に言い聞かせてから幹線道路から逸れて教会に行く事にした。

板チョコがそのまま取り付けられたような扉のノブに手を伸ばし、何となくだがこういう神聖な場所に踏み入るのだから礼儀作法を忘れちゃいけないと思い扉を軽くノックをして、

「失礼しまゝす」

と、細々と言つて僕は教会に恐る恐る足を踏み入れた。

教会内は窓から差し込む光に照らされ和やかな雰囲気包まれ、横長の古めかしい茶色い腰かけが綺麗に陳列し、何と言つても祭壇まで続くレッドカーペットの先にある人生初めて見るステンドグラスが圧巻だった。

「何ともまあゝ神々しいなあ」

僕は思わず口に出してしまった。

背中から純白な翼が生えた天使と思わしき女性の両腕に薔薇のツルが絡み吊し上げられており、華奢な両足には重りが付けられて身体を自由を奪われながらも微笑んでいた。

「ん？」

ステンドグラスから差し込む神々しい光の下で膝を付き、祈りを捧げる人物がいた。濃い紺色の服装からしてシスターさん（？）だと認識した。

「どうかしましたか？ 迷える子猫ちゃん」

僕の気配に気づいたのか突然、シスターさんは祈りをやめてこちらを微笑みながら振り向いた。

「邪魔しちゃいましたか？」

そう言いながら僕は辺りをきよきよと見渡しながらレッドカーペットを歩きシスターさんの元へ足を進める。

「そうですねえ」

シスターさんは立ち上がりながらそう呟くと、

「ちょうど、よかったんじゃないでしょうか？」

顎に指を添えて微笑みながらそう続けた。

ふむ、なんだかミステリアスな感じの人だな。服装が顔でしか

判断出来ないが、少し幼さが残る顔立ちから推測するに同じ年か年下？ まさかの年上って事はない、よな……。

でも、同じ年だろうが年下だろうが敬語を使いたくなるのはなぜだろう？

シスターさんだから？

それとも、彼女が少し幼さが残る顔立ちの割に年上と思わせるような大人な雰囲気を漂わせているせいかな？

ふむ、それにしても修道服が似合ってるな。

彼女のためだけにこしらえられた衣服に思えた。何もかもを包み込むような優しい笑顔が要因なのかも知れないな……。

「私の顔に何か付いてますか？ 迷える子猫ちゃん」

まじまじとシスターさんの顔を見ていたのがバレたのかそう言うてから何の計らいかは分からないが顔を近づけてきた。

吐息が掛るか掛からないかのすんでの所まで顔を近づけて来るもんだから、僕の心臓はバクバクである。

「いえ、何でもありません。って、さっきから気になってたんですけど『迷える子猫ちゃん』じゃなくて『迷える子羊』じゃないんですか？ それに子猫ちゃんって主に女の子に向けて使う言葉だと思っんですけど……」

僕は冷静を装いながら視線を逸らして誤魔化すようにシスターさんにそう告げる。

「ふむ、言われてみればそうかも知れませぬね。じゃー訂正しますね。迷える子犬君」

と、満面の笑みで名称を変えてきたシスターさん。

うーん、悪気はないんだろうけど何だろうがこの納得しかねる気持ち持ちは……。

「どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません」

「そう、ですか？」

首を傾げて少し不満気な表情を浮かべるシスターさんに僕は吹けない口笛を吹いて誤魔化してみる。

「神に誓ってですか？」

僕の不審な行動を怪しんだのかシスターさんは眉をひそめて、地の利を生かした最凶の詠唱魔法を唱えてきた。

「天国にいる ジョンに誓って……」

うん、自分自身にツツコミを入れようと思う。ジョンって誰だ？

「……分かりました。そのジョンさんに免じて信じましょう」

ようやく納得してくれたシスターさんは静かに微笑んでくれた。良かった。これで天国にいるジョンも報われるな……。

うん、分かっているって。やればいいんだろ？

せえゝのっ！ ……ジョンって誰だよ。

「さて、迷える子犬君は一体何の為にここに來たのですか？」

「んゝ単なる寄り道、かな？」

「寄り道、ですか……？」

寄り道って言葉に引っ掛かったのかシスターさんは俯き少し険しい表情を浮かべた。

さっきまでのミステリアスの雰囲気から少しピリツとした感じが見受けられる。やはり、お祈りの邪魔をしてしまった事を怒っているのだろっ。いくら聖職者だろうと寄り道を理由に大事なお祈りの時間を邪魔されたんだ、怒ってない訳がないだろう。

「すいませんでした……」

僕はシスターさんに深深くお辞儀をした。

それぐらいの事をしたのだから当たり前だろ？

「……えっ？」

僕の行動を見てシスターさんは呆氣にとられたのか少し間の抜けた声を上げた。

「いや……やっぱりお祈りの邪魔をしてしまった事を不快に思っているんじゃないかと思って……」

「いえ、そういう事じゃないですよ。うん、そうですね……」。

これも何かの縁ですし、迷える子犬君は何か悩み事は無いですか？」顎に指を添え少し首を傾げてシスターさんは僕にそう尋ねてきた。

「悩み事です、か……」

ふむ、突然そんな事を聞かれてもなあ。ここはあれか、悩み事が無いのが悩み事なんですよって、茶目っ気たっぷりと言う所、か？

「あつ、ちなみにですよ。悩み事が無いのが悩み事とか言うのはなしですよ。君は見るからに捻くれた方の方ですよ」

シスターさんは眉間にしわを寄せジト目で僕の事を見つめてきた。「そ、そんな訳ないですよ。僕は正直者で名が通ってますよ。そうですね、悩み事じゃないんですけど、あのステンドグラス」
「たまたまだろうけど、考えていた事が見抜かれてしまい僕は少し焦ってしまった。」

誤魔化すために少し声の上擦ってしまったけれど、咄嗟にしては好プレーだったと自画自賛してみる。

「ああ、あれですか。私には理解出来ませんね……」

「え？ 何ですか？」

露骨に不快感をあらわにしたシスターさんに僕は首を傾げて尋ねる。

「腕と足を縛られて笑みを浮かべているんですよ。ありえないですよね？ 普通、亀甲縛り＋吊りし上げにボールギャグを施されてやっと悦を感じられるかどうかというのに……。全く、甘いです」

よ」

真顔でそう語る聖職者。いや、性職者に僕は少し立ち眩みがした。全く、どこが好プレーだ。失策じゃないか。好プレーだと自画自賛していた数秒前の自分が恥ずかしい！

ん？ 今のはさりげなく自分の性癖を暴露　いや、考えすぎだ……。

「まあ、今のは冗談ですけど、あら？　少くし残念そうな顔をしてますう？」

不気味な笑みを浮かべてシスターさんは僕の顔を覗き込むように詰め寄ってきた。

「まさか、僕は紳士ですよ。そんな訳ないです」

思わぬ問い詰めに少し後退しながらも首を振って否定する。

この人、狙ってやっているんじゃないだろうか？

「それはさておき……」

馬鹿な流れを変えるかのようにシスターさんは手を叩いて一拍入れた。

そして、瞳を閉じて小さく息を吐いた後に瞳を開いたシスターさんの雰囲気は先ほどのお茶らけたモノからキリツと真剣な雰囲気へと変貌した。

僕はシスターさんの真剣な眼差しに息を吞んで、こちらもそれなりの対応を取らねばと心を落ち着かせて臨む事にした。

「……迷える子犬君は探し物がありますか？　例えば、自分探しとか」

「いえ、特には。それに自分を見失うほど落ちぶれちゃいませんよ。たぶん……」

「なるほど……」

僕の返答に対して真剣な面持ちで頷いてみせるシスターさんに僕はこの質問には何かそこまで考えさせるほどの真意が隠されている

のかと思い、聞いてみる事にした。

「あの〜頷いてますけど、この質問に何か意味はあるんですか？」

「あつ、特にないですよ」

「ないのかよ！」

あつ、思わずタメ口でツツコミを入れてしまった……。

いやいやいや。あの真剣な表情で質問されたからには何か思惑でもあったのかと思うだろうに普通。でも、蓋を開けてみると何もないうて、そりゃ〜反射的にタメ口になってツツコミを入れてしまいますぜ、ダンナ〜。

「ふふふ、やつと本性を現しましたね。さつきから気になってたんですよ。その不似合いな敬語」

身体を震わせながら不気味に微笑むシスターさんの姿がそこにはあった。何て言うか、してやったりと言った感じで僕の事を見つめていた。

「……そんなに違和感ありましたか？」

「ええ、大ありです。大人の遊園地と謳っておきながらその中で繰り広げられるイベントの数々が全て幼稚染みているぐらい違和感があります」

ブンブンと少しお冠なのか頬を膨らませながらそう述べた。

そんな彼女に対して額を押えて頭を悩ます少年が一人、大きな嘆息と共にがつくりと肩を落とす……。

えつと……これはどう処理をしたらいいんだろうか？ この人が言う、大人の遊園地って言うのは疲れた体を癒す大人たちの最後の楽園（ただし、有料）の事だろ？

それにシスターさんが発した言葉から推測するに、大人たちが唯一幼少期に戻る事が許される場所のようだ。

ふむ、だったら僕に言える事はただ一つだな……。

「シスターさんが言うそこは大人の遊園地じゃなくて大人の幼稚

園の事じゃないかな？」

うん、実に柔和に表現された言葉なんだろうかと、自画自賛してみる。

僕の言葉に納得してくれたのか、シスターさんは感慨深く頷いて「なるほど」と小さく呟いていた。

「……つまり、幼稚プレイ専門の場所って事ですね」

真顔で述べられたその言葉に僕は膝を付いて崩れ落ちる。気のせいか、少し口の中が鉄っぽい味がした。ああ、これが大人の味と言う奴か……。

しかし、この人……折角、僕が柔和にフォローしてまとめてあげたと言うのに全て台無しにしゃがった。それに膝を付いて崩れ落ちた僕の事を不思議そうに首を傾げながら見つめるその様に少し憤りを感じずにいられないな。

何なんだ？　ワザとやってるのか？

それとも、天然でやっているのか？

もう、訳が分からん……。

「……あのくどうかしりましたか？」

そんな僕に少し心配そうな表情を浮かべながらシスターさんが話しかけて来た。

いかにいかに……。僕はもう少し、クールだったはずだ。なのにここに来てからペースが乱れまくっているな。まるで、水無月姉弟（特にアスカ）と接しているみたいだ。

なんつうか手応えがないんだよね。ひらりとかわされているつて言うより軽くあしらわれているような感じで……。

もう、いいや。敬語なんて使っているからペースが乱されているんだな、きつと……。

「……ああ、大丈夫だ」

僕は敬語を諦め、タメ口でそう答えた。そして、身体を揺らしながらゆつくりと立ち上がって平然を装う。

「そろそろ、お暇しようかな」

立ち上がり際にそう告げるとシスターさんはきょとんとして少し間の抜けた表情を浮かべた。そんな彼女の態度の僕は首を傾げる。

「もう、帰っちゃうんですか？」

少し名残惜しいのか上目遣いで訴えかけて来たシスターさんに不覚にもドキッと動悸がして、少し顔が熱くなった。

「いや……ほら、あまり長居したらシスターさんに迷惑かなって少し心もとない態度ながらも照れてしまったのを上手く誤魔化せたいと思う。その僕の言葉にシスターさんは納得してくれたのだろうか、軽く頷いてみせた。

「……そうですね。お互い、色々と都合がありますし、ね」

どこか物寂しさを彷彿させるかのような憂いた表情を浮かべながら話したシスターさんの印象が何か妙な違和感を感じられずにいらなかった。

まるで、これが最後のお別れのようなそんな錯覚を思わせた。

「……じゃ～僕はこれで」

「はい、お見送りをします」

ゆつたりとした足取りで僕たちはレッドカーペットを歩き、板チョコがそのまま取り付けられたような扉のノブに手を伸ばしてゆつくりと扉を開けた。

扉を開けた瞬間、日の光がちょうど真正面から差し込み思わず目を細め、手で少し遮る。

「それじゃ～また」

「……近いうちにまたお会いしましょう」

小さく手を振って微笑みながらシスターさんに見送られながら僕

は不思議な雰囲気を漂わす教会を後にした……。

序 章　死にたがりの少女　前篇　其の四

翌日。

毛布の心地の良い感触を名残惜しみながら今日から始まる新学期……。

僕は無事、進級をして本日から二年生となる。しかし、特にこれと言った特別な思いがある訳でもなくいつも通りの朝を迎える。

二階にある自室で、ある程度の支度を整えてから一階の居間にいつも通りに向かう。

居間のテーブルに置かれた朝食を時間たつぷり使って食べる。普段なら悠長な事をしていられないかも知れないが今日は午前中、始業式をやる事になっている。

だから、僕は始業式だけをすっぱかしてどのクラスに編成されるかを確認しに行くだけの予定を立てていた。

別段、始業式に行かなきゃなんほど重要な事でもないし、僕と同じような考えを持つ生徒が他に結構いたりする。

ふう、そろそろ行くでしょうか……。

僕は食べ終わった食器を水でさらして、後で洗えるように施しておく。そして、少しダルさが残る身体に鞭を打ちながらのそのそと玄關に向かって進み、家を後にする。

ラッシュ時を大幅に過ぎた時間帯に家を出たものだから、通勤学者はほとんどいない少し寂しい道中を黙々と何気なく歩く少年が一人……。

見渡す限り人っ子一人、車一台も通らない道を歩く様は何だかこの世界の最後の生き残りのような錯覚さえ感じた。この静寂さがそう強く思わせているのだろうか、それとも……。

そんな馬鹿っぽい考えを巡らせている内に僕が通う平々凡々な公

立高校に辿りついた。

ちょうど始業式が終わったのか、生徒達の憩いの場所たる中庭に人がぞろぞろと集まり出していた。その中庭に僕が求めるモノがある。

僕は人ごみを掻き分けながら校舎の壁に沿って置かれたクラス表を覗き見ようと、試みたその時、背後から誰に思いっきり引っ張られ後ろに戻された。

不快感をあらわにしながら僕はそいつを睨みつけるために振り返る。すると、ニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべている見慣れた輩がそこにいた。

「キッサラくん。お前、また式をばつくれただろ」

僕の肩に暑苦しく手を回して、気色の悪い笑みを近づかせて来た男子生徒、水無月アキトが苦言を呈してきた。

「別にいいじゃん。そんな事よりも僕はどのクラスになったか確認しなければならん」

「ああ、それなら心配いらないぜ。俺達一緒のクラスになったからな」

「はあ？ お前と一緒？」

「そう、それと姉貴も一緒だぜ」

「マジか……」

アキトの言葉を聞いて僕は愕然とした。別にアキトと同じクラスになった事を嘆いた訳ではない。むしろ、後者の人物に対してだ。

水無月アスカ 一年の時もそうだったが、まさかまた同じクラスになるうとは思ってもよらなかった。誰だ、このようなクラス分けをした輩は……。僕に何の恨みがある？

それに片割であるアキトまでもが一緒のクラスとなると、思い当たる節は一つしかないなよな。暴君の抑止力たる生贄を二名用意したって所、か……。

はあ。急遽、親の仕事の都合か何かで転校出来ないかな……。

「ん？ どうしたんだ、キサラ」

「いや、転校ってどうやったら出来るのかなって」

「……登校初日からお前は一体何言ってるんだよ」

「……お前、アスカと同じクラスなんだぞ。その意味分かってい
るのか？」

「……それを言うなら俺なんか姉貴と血の繋がった姉弟だからな。
だから、キサラの一、二年間なんて俺にとつたら一、二分程度だ。
我慢しろ」

「ねえ。何を我慢しろってえ？」

『うわっ！』

聞き覚えのある女の子の声が聞こえて、僕達は思わずワザとらし
いリアクションをして驚いた。

そして、恐る恐る声が聞こえた後方へと視線を向けるとそこには
怪しい笑顔で僕達を見据える美少女が いや、美少女の皮を被つ
た鬼神がそこにいた。

鬼神は僕達の肩を人知を超えた力で握りしめて、その苦痛に僕達
は表情を歪める。

「あ、アスカ様いらっしやっただんですか……」

「お、お姉さま。ご機嫌麗しゅう……」

「あら？ 二人とも普段と口調が変わっているけど、どうかした
のかなあ？」

不気味に微笑みながらそう話したアスカ様はさらに力を込めて僕
達の肩を握りしめる。僕達の肩からパキポキと怪しげな音が鳴り始
めた。

アスカの人知の超えた力で肩を握りしめられているせいで僕達の
肩が限界に達して悲鳴を上げているようだ。それに身体から変な冷

や汗が流れ始めている。

ふむ、このままでは粉砕骨折へ直行か……。南無ぐだな。

すると、唐突に大きな溜め息を吐いたアス力は僕達の肩から手を離れた。解放された僕達の肩は粉砕骨折を免れたが、未だに激痛が走っていた。

「まあゝいいわ。そんな事よりも私達のクラスに転入生が来るみたいなのよ」

少し興奮気味に語気を強めて発せられた言葉からは何かを期待しているのか、ウキウキ感が伝わってきた。

「ああ、俺もその話を聞いたわ。何でもかなりの美少女らしい」

「へえゝ。転入生ねえゝ。何でまた？」

「そんな事知る訳ねえゝだろ」

「まあゝ確かに」

「でも、気にならない？ その美少女と謳われている転入生が果たして、私の地位を脅かすほどの美少女なのかって」

真顔で自意識過剰発言をした少女に僕は思わず口を開けて馬鹿面をさらしてしまった。

いや……。確かにコイツがこういう性格だって一年も付き合っていたら自ずと分かつては来るが、こうも堂々と公言されちゃゝどういう反応をしていいか分からなくなるだろ？

アス力が外見上、非の打ち所のない美少女なのは確かなのだが、中身がな……。ワガママ姫と言うかおてんば姫と言うか、まあゝ一言で纏めるなら暴君、独裁者だな。

そんな彼女の被害を一番に被っているのは弟のアキトかも知れないが、僕もその一人になりつつあるな。いや、もうなっているか……。…。

僕が馬鹿な考えにふけっているとチャイムが辺りに鳴り響いた。

「やべ、そろそろ教室に行かないと」

チャイムの音を聞いたアキトが辺りを見渡しながらそう呟く。

「そうね。アキ、シゲル。さっさと教室に行くわよ」

アキトの言葉に頷きながらアス力は僕達に行くように促す。その言葉に僕達は軽く返事をしてから自分達の教室へと足を進めた。

僕は新しい教室の場所が分からないため、水無月姉弟の後を追うように歩いた。廊下を歩き階段を上がって、また廊下を歩いて辿り着いた三階のとある教室。二年C組と表札がぶら下がっている教室に入り、黒板に各々が座る座席表が描かれていた。

僕の席は幸運な事に後列の席だった。でも、その束の間の至福は無残にも打ち破られてしまう。僕の席は中庭を臨める窓側の席（黒板を正面に左）から二番目の席で、そこまでは良かった。だが、その席の左隣にはあの暴君が座り、暴君の前にはアキトが座った。なんつうシフトだ、と僕は思った。

僕とアキトで暴君の妨げを担う最後の砦として敷かれた布陣みただ。

ホント、僕に何の恨みがある？ 悪意を感じられる。

しばらくしてからこのクラスの担任教師らしき人物が現れた。何の特徴もない平々凡々な中年男性だった。

ん？ そういえば……僕の前の席が空いているみたいだけど、まさか転入生の席って事は無いよな。いくら何でも初見の方には荷が重すぎる席だと思うぞ。特に左斜め後ろの要注意人物がな……。

「じゃー予め聞いていると思うが転入生を紹介する」

教卓の前で担任教師がそう宣言した瞬間、クラスメイト達が一斉にざわざわと騒ぎ始めて色々と憶測を流し始めた。

ある男子生徒は帰国子女なんじゃねと話し。ある女子生徒はどこかの国のお姫様なんだってと話す。

ホント、どれもこれも馬鹿な推測でこの国は平和だなあ〜と僕は

年寄り臭くしみじみと思っていると、ガラガラと音を立てて前の扉から綺麗な黒髪をなびかせながら凜々しい物腰でゆつくりと入って来た噂の転入生さん。

少し幼さが残る顔立ちで血が通っているのかさえ分からなくなるほどの透き通るほどの白い肌質、すらりと伸びた手足のスレンダーな体躯　うん、噂通りの美少女なんじゃないかなと思う。アスカの地位(?)を脅かすかどうかはさておき……。

少女は凜々しい物腰でゆつくりと教卓の方へすたすたと足を運ぶ。そんな少女の容姿を目の当たりにしたクラスメイト達は先ほどまで騒がしかったのにも関わらず、一瞬にして物静かになった。

教卓まで足を運んだ少女は黒板に自分の名前らしきモノを書き始め。書き終わったのか、こちらを振り向いた少女の顔はどこか物寂しげな表情を浮かべていた。

ふむ、気苦労が絶えないのかねしくれはるかなんて、考えながら少女の背後にある黒板に目をやる。そこには時雨悠と振り仮名まで丁寧に書き記していた。

「私は……」

自己紹介をするのか唐突に声を上げた少女だったが、途中で口ごもった。

うん、大勢の前で自己紹介する事になったんだ、緊張しない方がおかしいだろ。

少女は気持ちを切り替えるためか、瞳を閉じてゆつくりと深呼吸をした。そして、ゆつくりと瞳を開いて、

「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」

と、冷たい眼差しで淡々とそう語った……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270ba/>

メモダス

2011年12月31日19時48分発行